

講評

iPad及びMoodleシステムの活用と実践による、漢字学習の意識・能力向上を目指して

学習現場がデジタル化する昨今、国語科も新しい地平を切り開いていく必要がある。本報告はそのような趨勢の中で、漢字学習におけるデジタルツールの活用が学習者の学習意欲や能力の向上に有効であることを実証した。活用媒体はiPadとe-learningシステム“Moodle”であり、特に書き取りまで学習できるiPadについては紙媒体より好感する学習者が、58.2%に及んだ。報告から看取できる両ツールの「よさ」は、学習者の意欲喚起のほかにも、個々の学習実態に応じる柔軟性と、時や場所を選ばないユビキタス性、学習の可視性などにある。

また、本報告では両ツールを活用した漢字学習の計画や実践が示され、それらの有用性に関するアンケート分析や、研究対象ではない他学年と対照させた漢字能力検定の結果等が科学的に示された。1年間の取り組みとしては大変精力的かつ精緻である。課題として挙げられた「紙媒体を活用した学習」をどのように位置づけていくかという点、今回検討対象とならなかった「本取り組みと読解力向上との関係」についてもさらに研究を続けていただければと感じる。

(奈良教育大学教育学部 教授 棚橋 尚子)

留学生による自律的な漢字学習を実現するための支援方法の開発と実践

この教育実践では、学習者自らが漢字学習の目標を設定し、学習計画を立て、支援者の提供するタスクに取り組む中で自律的な漢字学習を体験することができるようにデザインされている。具体的には、「漢字ワークショップ」を企画し、参加希望留学生を募り、延べ9回のワークショップを行っている。

その実践の過程は丁寧に説明されており、「漢字学習チェックリスト」「漢字学習タスク一覧」「個人化辞書シート」など、ワークショップで実際に使用した様々な資料が掲載されていて、大変興味深く、日本語教育の参考になる。

しかし、今回の実践研究から得られた知見に関する考察は物足りない。また、この教育実践に対する自己評価が不明確である。ワークショップでの参加者の実際のディスコースを分析するなど、実践を評価する方法について考えることが課題である。

(名古屋外国語大学外国語学部日本語学科 教授 尾崎 明人)

日本語上級文法eラーニングコンテンツの開発

—ブレンディッドラーニングモデルの構築に向けて—

日本語能力試験N1レベルの文法学習を支援するeラーニング・コースウェアの開発に関する報告である。報告書からはコースの全貌がつかみにくいのが、報告者の開設しているホームページによると、このコースウェアは15回、1回90分の学習を想定し、4肢選択の穴埋め問題が1079問用意されている。その内容は、前回の復習、N2レベル問題、N1レベル問題、文の組み立て問題、文章の文法問題、新傾向文法問題、復習問題、動画解説（計26本）などである。問題文の単語の難易度に配慮する、N2の問題では解説フィードバックを用意するなど、随所に工夫が凝らされている。

このコースウェアを見るには利用料を払う必要があるため、一般公開と言えるかに疑問が残

る。また、このeラーニングコンテンツと従来の対面授業をどのように組み合わせるかについても言及、考察があると副題にふさわしい報告になっただろう。

(名古屋外国語大学外国語学部日本語学科 教授 尾崎 明人)

トピック共通で複数の日本語レベル及びビジネス知識レベルに対応したビジネス日本語教材の開発

本研究は、ビジネス経験や知識、日本語力、スキルの熟達度などに関して、どのようなレベルの学習者でも使えるビジネス日本語教材を開発することが目的であった。その結果、教材『基礎ビジネス・スキル対応 ビジネス日本語』（154ページ）が作成されている。ここでは、トピックとして「社交・接客・訪問」「ビジネス文書」「会議」など7分野を設定し、検討を重ねた結果を教材化している。これは大きな成果であり、その努力に敬意を表したい。

報告書では、この教材を作成する過程について説明されているが、興味深いのは「4-2-5. 教材試用後のフィードバック・コメント」である。教材開発の途中で、教材を試用した授業担当者から寄せられたコメントを、内容別に分類してまとめている。いずれも現場ならではの実態や状況がわかり、有意義である。今後は、「8. 展望」にある通り、この教材を実際に数多く使用して、より充実した教材に磨き上げられることが期待される。

(武庫川女子大学言語文化研究所長 佐竹 秀雄)

ムスリムが地域社会で共生するために必要な日本語教育カリキュラムの開発

本研究は、日本で生活する、ムスリム（イスラム教徒）が地域社会で共生するための日本語教育カリキュラムを開発しようとするものである。インタビュー調査などによって、困難な状況を抽出し、それに合った具体的な表現をもとに授業シラバスを構築している。その内容は、異性と握手できないことを断る、など、場面に対応した実践的・具体的なものである。関連語彙も整理され、状況に応じた具体的な言語表現を取り上げる実践的取り組みとして高く評価される。

ただし、フィールド調査の対象が1名のみでいいのか、サバイバル日本語としてのシラバスを考えた場合、十分自然な日本語となっているかということ（疑問における「が」「は」など）、わかりやすく学習しやすい文型はほかにないか、文型の積み上げはどうか、シラバスの順序性はこれが最適か（例えば「健康」より「旅行」が先か）というように、いくつかの観点からのさらなる検討の余地はあるように思われる。今後の研究の進展に期待したい。

(早稲田大学文学学術院 教授 森山 卓郎)

選考委員

尾崎 明人 名古屋外国語大学外国語学部日本語学科 教授

佐竹 秀雄 武庫川女子大学言語文化研究所長

棚橋 尚子 奈良教育大学教育学部 教授

森山 卓郎 早稲田大学文学学術院 教授

高坂 節三 公益財団法人 日本漢字能力検定協会 代表理事

植田 耕治 公益財団法人 日本漢字能力検定協会 理事